Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.42
2017

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

■カザフスタンへ専門家派遣
■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■韓国へ専門家派遣事業（セミナー）を実施しました。
■中学校で出前講座を開催しました

国立長崎医療センター（大村市）にて

カザフスタン訪問記 2017

長崎大学 学長特別補佐　山下俊一

2017 年 8 月 25 日からカザフスタン共和国を一足先に訪問していた私たち長崎大学チームが、蒔本恭長崎県医師会長、下川功長崎大学医歯薬学総合研究科長らナシムー行とセメイ (旧名セミパラチンスク)で合流したのは 28 日午後からでした。セメイ国際空港とは名ばかりで、改造中とは言え、滑走路は未舗装で乾いたステップ草原の大地への直接着陸でした。それでもアルマティから約 2 時間のフライトは、以前のヤック 40 の補助椅子並みの座席の取り合いという劣悪な競争的状況から、アントノフ 40 の普通の旅客座席へと格上げされ、機内サービスや情報誌もあり、隔世の感です。

中央アジア最大の国であるカザフスタン共和国は、日本の国土の 9 倍、総人口は約 1800 万人で、天然資源に恵まれ急速な経済発展を遂げています。

今回の現地訪問は、大学間学術交流協定の各機関との連携強化や国際会議への参加が目的でしたが、同時に帰国しているナシム研修生らとの交流を深め、両国の地域医師会を通じた専門家人材交流や研修指導についての打ち合わせもありました。アルマティ市では、先にシベリア抑留の日本人墓地を、米満伸久県医師会常任理事と国立長崎医療センターの前田茂人先生らと一緒に慰問することができました。 145 名の無名捕虜の墓は、広大な中央墓地の端にありますが、訪問するたびに周囲の環境整備が進んでいます（写真 1 ）。

（写真 1）アルマティ市にある日本人墓地

はじめに、セメイ医科大学での公式行事である第 13 回アチャバロフ記念国際会議 （セメイ医科大学主催) のオープニングセレモニーにおいて、長崎大学医学部国際学生奨励賞を 2 名の優秀な医学生に授与しました（写真 2 、 3)。 同奨励賞（長崎医学賞）は、昭和 53 年 3 月本学医学部卒業生の卒後 20 周年記念時に設立された基金を中心に運営されています。 1998 年以降これまでに合計 33 名の現地医学生を顕彰していますが、その第一回受賞者で長崎大学に留学したアイヌール・アキルジャノワ先生は学位取得後、現在首都アスタナ市のナザルバエフ大学のゲノム医療研究部門長として活躍中です。

（写真 2）セメイ医科大学

（写真 3）セメイ長崎医学賞の受賞者 2 名

８月 29 日はカザフスタンでは特別な記念日です。それはソ連時代の 1949 年８月 29 日に、このセメイ市から西へ150Km 離れた四国ほどの大きさの広大なポリゴン（実験場）において、核物理学者クルチャトフ率いる軍産複合体が初めての核実験（長崎原爆プルトニウム同型)を行ったことと関係します。東西冷戦構造の時代、1989 年10月19日の最後の地下核実験が行われるまで地上、地下合わせて 500 回近い核実験がポリゴンで繰り返し行われました。1991 年８月 29 日、最初の核実験と同じ月日に当時のカザフスタン社会主義共和国のナザルバエフ大統領によってそのポリゴンは閉鎖されました。

その後ソ連邦が解体しましたが、いち早く独立したカザフスタン共和国のナザルバエフ大統領による国際社会への働きかけにより、国連は８月 29 日を「核実験に反対する国際デー」と定めました。その以前から世界中で高まりを見せていた核実験反対活動は、ネバダ・セミパラチンスク運動として知られ、当時の現地ではソ連政府と被爆地セメイとの息詰まる攻防が繰り返えされています。

ナシムでは、秘密裏に繰り返された核実験の影響を、これも極秘下で調査した「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民および家畜の健康状態」という学術報告書を発掘し、一部日本語訳出版しています。その結果、当時の科学アカデミーを代表してバルムハノフ博士が、第２回永井隆平和記念・長崎賞を受賞しました。さらにソ連時代の晩年にセミパラチンスク州共産党第一書記長（知事）であったボスタエフ氏が書かれた「ポリゴン８・29」という本がありますが、この「ポリゴン８・29」に関する回顧録と未来への遺言を「人間と原子」の邦題で邦訳出版しています。

まさに、８月 29 日は、広島と長崎の原爆記念日に相当する重要な核兵器廃絶と平和希求の市民総参加の一日なのです。この日、セメイ市のイルティシュ川中州にある平和公園内の核実験場閉鎖記念モニュメント前で、セメイ医科大学のジュヌソフ新学長、デュスポス国際担当副学長らと広島、長崎の代表団が母子像の前で献花し、さらに昼からの記念式典に市長共々参加し、日本からの平和のメッセージを述べさせて頂きました（写真４)。 またセメイ市は 1718 年に発足した古い文化町ですが、1854 年から 59 年までドストエフスキーが抑留されていたことでも有名です（写真５)。 その苦悩の経験を元に、その後「死の家の記録」が世に出されています。

（写真４）セメイ市核実験反対の記念碑８・29

（写真５）セメイ市のドストエフスキー博物館

ここ数年の新しい動きとしては、長崎県医師会とカザフスタン医療会議所東カザフスタン支部は医師等の交流覚書を締結し、積極的に人事交流を深めていることです。その相手側責任者である旧友ルスラン・エンセバエフ先生のサウナ・プール付きのご自宅に招かれました。さすがカザフならではの馬肉の刺身から牛や羊のふんだんな肉料理のご馳走と、馬乳酒やウォッカの乾杯の連続でしたが、日本人の胃袋は悲鳴をあげ続けていました。さらに、その後の地元関係者との遅い夕食会が続きましたが､サモワールで供されるチャイやアゲパンのバルサックは､豪華なデザート以上でした。

このようにどこにあっても大歓迎を受けましたが、羊の頭と馬肉が最上級のお持て成しです（写真６、７、８、９）。

（写真６）カザフ料理１（カズ、パルサック、マントウ）

（写真７）カザフ料理２（羊の頭とベスバルマク）

（写真８）カザフ料理３（肉料理などの前菜）

（写真９）カザフ料理４（馬肉ステーキ）

翌日 30 日は憲法記念日でしたが、ナシム夏季研修生や長崎大学に留学していた先生との懇親会には、12 名の研修生らが集まってくれました（写真 10）。ソ連崩壊後、街中でのレーニン像は姿を消しましたが、ここセメイ市の公園の一角には、いろんな像が集められています。中でも巨大レーニン像が今なお雄姿を見せていました。 地方でも景気は上向きなのでしょうか、市内至る所で道路工事中でしたが、一歩郊外に出ると 360 度見渡す限り地平線という乾燥したステップが特徴です（写真 11）。

（写真 10）ナシム研修生らと

（写真 11）セメイ市郊外の広大なステップ

一方、同時期に開催されたセメイ州立がんセンターの病理マスタークラスの講習会には、原爆後障害医療研究所の中島正洋教授、橋口慶一助教、医学部法医学講座の池松和哉教授、大学病院病理医育成･診断センターの新野大介教授らが講師として招聘され、講演と質疑応答、そして懇親会など、

昼夜を問わず多忙を極めていました。

８月 31 日アルマティ市での国立シズガノフ外科学センターでは、メデウベーコフ副院長との協議で学術交流協定の延長が合意されました。本センターでは江口晋教授らのグループが、肝移植などの医療協力を行い着実な実績をあげています。午後からの国立カザフスタン医科大学訪問では、ヌルゴジン新学長と英語で歓談し、これまでの交流実績に加えて客員教授の派遣や新たな共同事業が協議されました（写真 12、13）。

（写真 12）アルマティ医科大

（写真 13）アルマティ医科大学学長と

旧交を温めていた前学長のアイカン・アカノフ先生は、2007 年の長崎大学客員教授でもあり、教育改革、被ばく医療、そして公衆衛生学の泰斗でしたが一年前に急逝され、コクトベ山に対峙する丘の上に安らかに眠っておられました（写真 14）。夜は、カザフスタン医 療会議所の会長であるクルジャーノフ先生と会談することができましたが、蒔本会長とは引き続き県医師会との交流と連携の強化が合意されました。

（写真 14）アカノフ前学長のお墓参り

最後に９月１日は、クルバン・アイト（犠牲祭）というイスラム教の祝日にあたり、幸運にもアラタウ山系にある標高 1700m のメデウ・スケートリンク場から 2 つのロープウェイを乗り継いで 3200m のタルガル山まで一気に登ることができました。 眼下に遠く標高 600m のアルマティ市街地を見下ろし、反対側すぐに氷河を頂く快晴の山並みを目の前にすると、その神々しさに心洗われる思いがしました。夕方、セメイ医科大学の前学長で現在はアスタナ医科大学の理事長であるラヒプベーコフ先生に、ヌルゴジン学長と共に私たちをグルジア料理に招待していただきました。10 年近くセメイ医科大学学長としてナシム事業にも貢献された実力者ですが、なんとその夜の帰国の折には、ラヒプベーコフ先生夫妻も同じフライトで、岡山理科大学での名誉学位受賞に合わせて沖縄旅行を予定しているとのことでした。

すでにナシムとカザフスタンとの被ばく医療を中心とした交流も 20 年が経過しました。今回の訪問では、本学の高橋純平助教と原研の留学生であるジャンナ・ムサジャノワ先生に大変お世話になりましたが、長崎からの多角的、多面的そして多元的な交流が、着実に実を結びつつあることが実感されました。以前は、モスクワ経由で丸一日がかりでのアルマティ入りでしたが、ノービザで入国でき、出入国の煩雑さや通関での厳しいチェックがなくなり、今はソウル経由で福岡から飛行時間８時間もかからない便利さとなりました。そして気心が知れた信頼できるカザフスタンの仲間も増えました。しかし、経済発展に伴う地域格差の拡大や保健医療制度の新たな社会改革の導入に伴うヒバクシャ医療への課題も多くあり、将来への飛躍に向けて双方の更なる努力が必要です。今後も人材育成事業を推進しているナシムへの期待は大きいものがあります。

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施しました。

長崎市の田上市長と

1992 年にナシムが設立されてから今年は 25 年の節目の年です。

ナシムではチェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報提供を行うため、今年も 6 名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は 7 月 13 日から約 1 ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。

【日程概要】

- ○ 7/12　長崎到着
- ○ 7/13 ～ 7/31　関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
- ○ 8/ 1 ～ 8/16　長崎大学病院等での専門研修
- ○ 8/17　帰国のため長崎出発

【研修生名簿】

1. シードリン　アレクセイ（ロシア）　オブニンスク医学放射線研究センター　病理学者
2. タターレンコ　オルガ　（ウクライナ）　ウクライナ放射線医学研究センター　研究者
3. シュマベツ　ワジム　（ベラルーシ）　ベラルーシー卒後教育医学アカデミー　助教
4. ミハイロフ　イーゴリ　（ベラルーシ）　ゴメリ医科大学　腫瘍外科　主任
5. サルタナット　ボルシンベーコワ（カザフスタン）セメイ腫瘍センター　病理学　主任
6. ズルフィーヤ　カリーエヴァ　（カザフスタン）セメイ医科大学医療センター　上級看護師

研修後の感想

Sidorin Aleksei（シードリン・アレクセイ）

ロシア連邦　オブニンスク医学放射線研究センター　病理学者

ナシム研修に参加する機会を頂きまして心から感謝します。研修中日本の医療制度、歴史、文化を知ることができました。日本に滞在し私は国民のオーガナイズ力、教養の高さ、勤勉性に驚嘆しました。医療制度は強い印象をもって見聞しました。病院は最新の医療機器が完備しており、全てが自動化されコンピューター化されていました。私たちが訪問した全ての医療機関で幹部の方達がお迎えをしてくださり、可能な限り見学を許可してくださいました。生じた疑問には完璧にお答えを頂きました。私たち１人１人が医療においても自らが従事する分野に関心を寄せました。そしてそれぞれが専門分野研修では大興奮で研修を受けました。私個人は、自身の手で多くの実験をし、私にとって新しい手法を習得できました。これには、放射線分子疫学部と放射線災害医療部の皆様、これら部門を統括する山下俊一教授、そして、タチアナ・ログノビッチ女史、ウラジーミル・サエンコ氏に特に感謝を申し上げます。

ナシム研修を組織してくださいました蒔本会長、講師の皆様、そして、訪問させていただきました医療機関の幹部の皆様、長崎県知事、市長には会見の機会を頂きましたこと、温かいもてなしに心から感謝いたします。特に強く心に残る瞬間でした。

歴史についても触れたく存じます。私たちは皆、広島・長崎で起こった悲劇を知っていました。しかし、その当地にあって心の奥深くに、そして心が凍り付くほどに、日本国民が耐え忍んだ悲しみと痛みを感じ取りました。長崎原爆資料館を訪問し、原爆被爆者と触れ合い、長崎原爆慰霊祭に参列した私が無関心でいることは不可能です。

最後に、日本の文化、日本の無限の美しさを知るためにたくさんの時間を割いていただいたことに本当にありがとうございましたと申し上げたいと思います。日本には刻む一歩一歩に歴史と伝統が根付いています。この深い印象は一生涯心に生き続けるでしょう。

長崎大学増﨑病院長と

Tatarenko Olga （タターレンコ・オルガ）

ウクライナ放射線医学研究センター　放射線被ばく医療・治療部門　研究者

ナシム（長崎・ヒバクシャ医療国際協力会）被爆者医療研修を受講する機会を得られましたことに心から感謝を申し上げます。放射線医学分野における実際的で限りなく価値のある経験を、そして新しい知識を得ることができました。また、世界の最も神秘的で素晴らしい国の一つ日本を訪れるという夢も叶えることができました。日本、特に長崎の特色をあげるとすると、それは尽きない話となります。私にとっては、この国は、自身の歴史を敬い、伝統を忘れず、限りない知性を保つ人々の暮らす国です。特別な感謝をお伝えしたいのは、研修中常に温かいご配慮を下さった山下俊一教授です。山下教授は原爆投下後 72 年目に捧げる報告を私たちにしてくださいました。その中でお話しくださったのは、ナシムの活動、そして、原爆と原子力発電所の事故からどのような教訓が得られたのかということでした。山下教授の別荘での歓待は触れないわけにはいきません。このもてなしと温かさのお陰で、私たちは最大に快適さを感じて過ごすことができました。

高村昇教授は自身の講義の中でチェルノブイリと福島原発事故後のがん罹患に関して語ってくださいました。高村教授は日本国民の意識と情報保有の向上のために多大な業務をこなしていらっしゃいます。特に、私たちは、川内村に関すること、そして、科学的知見がどのようにして村のインフラ再構築に寄与したかを知り得ました。これこそが知識の助けによって人々の意識が大きく変わるという証明です。高村教授には私が関心を持つ被爆者の心臓血管疾患と死亡率に関する疑問の答えを得る助力を頂けたことに心より感謝いたします。

研修中私たちは、放射線被曝を受けた方達の罹患率と死亡率を分析する活動をする日米共同研究機関である RERF（放射線影響研究所）を訪れました。現在では健康への放射線の影響に関して結果をまとめることが可能になる LSS（寿命調査）と AHS（成人健康調査）が行われています。

1958 年設立の日本赤十字社長崎原爆病院では多くの興味深いことを知りました。当病院は 14 診療科、350 床あり、原爆被爆者を含む様々な患者に高度な医療を提供しています。診療のみならず、病院の専門家らは被爆者の罹患率と死亡の関連分析を行い、治療の国際プロジェクトも実施しています。病院の資料部には治療を受けた被爆者の病理標本が保存されており、医療文書は 51 年間（1958 年から 2008 年）分がスキャンデータで保管されており、最近の 8 年間は電子化されています。また、言葉に表せない美しい場所にある、そして愛と思いやりに満ちた施設、恵の丘長崎原爆ホームも訪れました。そこでは原爆被爆者に最後の日々を心地よく過ごす手助けをしているのです。

自身の臨床専門研修を長崎大学病院の心臓血管内科において実施していただきました。この診療科では心臓血管疾患の診断と治療法を熟知する最高レベルの専門家が勤務しています。

長崎の原爆被爆者の記憶を留める原爆資料館と原爆死没者追悼平和祈念館に無関心になれる人は誰 1 人いませんでした。 8 月 9 日は第 72 回平和記念式典に参列しました。 1945 年のこの日爆裂した原子爆弾は多くの人の命を奪い、癒えない傷を与え、苦悩と病をもたらしたのです。この悲劇を記憶し、原爆によってもたらされた教訓に関する真実を未来の世代へと伝えなくてはなりません。

私たちの国々の将来も緊密な協力関係を築くことを望みます。皆様は、私の胸に生涯残り続けるでしょう。温かく受け入れてくださったことを感謝します。

Shumavets Vadim （シュマベツ　ワジム）

ベラルーシ卒後教育医学アカデミー　心臓外科　助教

最初、NASHIM プログラムの研修を提案されたとき、私は少し呆然としていて、お断りをしました。家族、つまり妻と子どもたちを残して１ヵ月半も遠い国に行ってしまうこと、彼らの休暇を奪ってしまうことは、何だか良くないと思ったからです。しかし、特に妻のサポートのお陰で、理性が感性に勝り、こうして私は日本にいます。

日本の医療を知り、文化や歴史に触れ、1945 年の原爆が日本人にもたらした痛みを自分の目で見て、感じて、被爆者への医学的、社会的、精神的サポートシステムを見学できる、またとないチャンスであり、チャンスであったと確信しています。

NASHIM プログラムを支えてくださった長崎県、長崎市にも、感謝の言葉を贈ります。長崎県と長崎市への訪問は、時間的には短いものでしたが、忘れ得ぬものとなりました。　長崎県医師会の蒔本先生、私たちと私たちの滞在のため、また NASHIM プログラム 2017 へご配慮くださり、ありがとうございました。

当然、NASHIM の全コースの魂であり、その創始者、創設者であり、激励者である山下俊一教授。素晴らしいレクチャー、さまざまな医学、文化全般をテーマにしたディスカッション、印象的だった長崎県西海市の訪問、日本、中国、そしてキリスト教の世界が融合した日本でも特殊な地域の文化との触れあい。私たちは皆、この訪問を永遠に忘れることはないでしょう。

素晴らしく構成されたプログラムのお陰で、原爆後の放射線の影響や、チェルノブイリ原発事故で苦しむ人々に施された計り知れない支援、汚染地域における早期及び時間を経てからの放射線の影響、甲状腺がんの診断能力と研究の展望を知ることができました。

また、«Molecular and cellular response to DNA double strand breaks» «Stem cells and translational researches», «Nuclear Medicine and PET», «Radiation, A-bomb and hematology, Transplantation» のレクチャーに含まれる情報は、大変貴重なもので、ミンスクでの私の仕事に適用することができます。特に、PET 画像診断の問題、そのメリット・デメリット、また、幹細胞を使った骨髄移植のプロトコールに関するディスカッションは、すでにミンスクの同僚たちに紹介させていただきました。

1945 年の長崎原爆とその被害を学ぶプログラムは、感情的、専門的意味でも脳裏に焼き付いて離れません。長崎原爆資料館、平和公園、爆心地の訪問、原爆被爆者特別養護ホームの被爆者とのふれあいは、強い印象を残すものとなりました。被爆者が自らの手で作ったプレゼントは、故郷のクリスマスや新年のツリーのデコレーションとなり、日本訪問を想起させてくれることでしょう。訪日にかかわるすべてのこと。原爆の悲惨さから、その証言者に対するケアまで、被爆者へのサポートシステムから長期的な放射線被ばくを研究する学術プロジェクトまでのことを。

2011 年 3 月 11 日、日本に未曽有の惨事が起こりました。日本史上最も強い地震と、多くの被害者を出した地震に次ぐ津波、そして福島第一原発の大規模な放射線事故です。福島原発事故の被害に関する一連のレクチャーで得られたすべての情報は、実際に使われています。私は、ベラルーシ、ミンスクの住民として（1986 年当時は USSR）チェルノブイリ原発事故が起きたときの、その恐怖と状況への無理解を個人的に感じました。事故やその被害についての情報を伝えるという作業を、

山下先生と先生のチームが、毎日、プロとして、地道に行っているように、被害を受けた地域の住民がそれを行うことができたなら、問題や恐怖心ははるかに少なかったであろうと確信しています。

部長の江石清行先生、M.D、副部長の三浦崇先生、M.D を筆頭とする長崎大学病院心臓血管外科にも、ご配慮に対し感謝の言葉を申し上げます。大変に温かい応対で、難しい心臓外科手術のテクニックを見学し学ぶ機会、マイクロスコープなどを使った手術を自分の目で見る機会をくださいました。江石清行先生とは、複雑な形態の虚血性心疾患患者の治療のための戦術的問題と外科的展望、僧帽弁、大動脈弁における侵襲性の小さい手術、拡張型心筋症患者の外科的治療、上行大動脈、弓部大動脈の手術で、高度急性期と慢性期における手術の特性などについて何度か個人的に討議をしていただきました。ありがとうございました。私の心臓外科訪問のために、江石先生は、この２．５週間に行われた手術のビデオと、僧帽弁の形成手術のレクチャーを用意してくださいました。それは大変素晴らしいものでした。

気づかぬうちに時間が過ぎ、研修も終わりとなります。寂しいこともあります。私たちNASHIM2017のチームの皆は、とても仲良くなり、ひとつのチーム、ひとつの家族のようになりました。この 35 日間、私と共に過ごしてくれたすべての人に感謝します。 アレクセイ、オルガ、イーゴリ、サルタナット、そしてズーリャ。皆ありがとう。ありがとう、友人たち。

長崎県中村知事、ナシム蒔本会長、高村教授と

Mikhailov Igor （ミハイロフ　イーゴリ）

ゴメリ医科大学　腫瘍外科　主任

先ず第一に「ナシム」研修に招聘頂きましたことを心より感謝申し上げます。蒔本恭ナシム会長、山下俊一長崎大学教授が、25 年間心血を注ぎ、旧ソ連邦諸国医療従事者を結びつけ続けてくださったことに感謝いたします。研修中、卓越した興味深い講義を提供してくださった講師の皆さまに心より御礼申し上げます。滞在中、中村法道長崎県知事、田上富久長崎市長への表敬訪問、長崎市内の病院・社会福祉団体の幹部の方々とお会いする機会を得ました。どこにあっても善意と関心を持って出迎えて頂けたことを感謝いたします。特に、腫瘍外科医である私にとって重要な意義があったことは、長崎大学病院に第二外科チームの業務を身近に知り得ることができたことでした。日本の外科医の悪性腫瘍治療における業績は広く知られているところです。しかし、百聞は一見に如かずです。 2 週間にわたり日本の外科医の仕事を見学させていただくことができ、病院の素晴らしい医療機器、そして的確な管理、手術チームの仕事の整然とした調和に深い感銘を受けました。近代的な麻酔技術によって外科医は慌てることなく手術をし、手術の手順をでき得る限り最高レベルにまで綿密に遂行することができるのです。

若い外科医の訓練が非常によく考えられており、カンファレンスにおいて予定されている手術の詳細な計画を発表しあっている。また、詳細にイラスト化された説明書きを用い、実施済の手術の報告をし、結果を分析しあっていた。カンファレンスは極めて民主的な雰囲気で、一番に若い医者らが意見を述べているが、それは、無条件に、関心、責任、職能の向上を助けるものである。消化器外科第二外科江口晋教授、高槻光寿准教授、日高匡章医局長、足立智彦助教、スタッフの皆様には衷心より感謝いたします。仲間として好意的に迎え入れて頂き、経験を惜しみなくシェアして頂きました。残念なことに、医療機器の完備、業務環境などの多くを羨むしかない状況です。私たちは一日に一つの手術台で二件の手術をし（大手術を除いて）時間が制限された環境にあります。しかし、いくつかの組織的な条件や日本の外科医が用いている技術的な手法を私たちも近い将来に我々のクリニックで導入したいと思います。患者の治療成績の向上につながると確信しています。

長崎市は私に強い印象をもたらしました。その驚異的な自然と建築、歴史を重んじる姿勢、親しみやすい人々、唯一無二の色彩を持つ町でした。 町を歩いていると 72 年前に原子爆弾が投下されたことなど信じられませんでした。長崎市民は故郷を愛していることが感じられました。滞在中いくつかの行事がありました。最も壮麗なお祭りはみなとまつりでした。素晴らしい花火とレーザーショー、最も感動的であったのは、仏教行事の精霊流しでした。故人の霊を精霊船に乗せ送るものでした。日本には多くの人たちが喜びをもって仕事をし、休息も上手いという印象を持ちました。全体として、長崎滞在は私に忘れられない印象をもたらしました。それは、通訳の竪山さんの素晴らしい仕事、そして、真に友情を結んだ研修参加者たちによるところが大きかった。

Saltanat Bolsynbekova (サルタナット　ボルシンベーコワ)

カザフスタン　セメイ腫瘍センター　病理学　主任

私、サルタナット・ボルシンベーコワは、カザフスタン東部のセメイ市よりナシム被ばく者医療研修参加のため長崎に参りました。私は、セメイ腫瘍センター免疫組織化学法リファレンスセンター所長、病理学部長として勤務しております。今回は私にとっては2008年以来の二度目の研修参加でした。初回の参加後、腫瘍学センターにおいて腫瘍の免疫組織化学研究方法を取り入れました。現在私たちの部署はカザフスタン共和国保健省の指導下に2011年から共和国内の3つの免疫組織化学法リファレンスセンターの一つとして機能しています。

今回二度目の研修では私はリンパシステムの病理学を深く学びました。これは現時点では世界においても切実な問題であり、近年においてリンパ増殖性疾患は増加の傾向にあるからです。東カザフスタン地方では腫瘍疾患罹患率は非常に高く、カザフスタン共和国での第2位の罹患率です。これはセミパラチンスク核実験場との直接的な関連があります。

滞在中、多くの医療施設、また被ばく者支援施設を訪問しました。日本政府は核爆発の被害者に大きな支援をしています。長崎大学医学部の教授らによって放射線に関して多くの研究がなされ研修期間中に講義でお聞きする機会を得ました。恵の丘長崎原爆ホーム訪問を温かい気持ちで思い返します。ナシム研修を実施された専門家らの的確でプロフェッショナルな業務、また、文化体験の実施を高く評価します。

蒔本会長率いるナシムの専門家の皆様に心から感謝します。同様に、特別な感謝を山下教授、中島教授、そして新野教授に捧げます。

皆様の知見と仕事に対する誠実な献身の消えぬ炎が更なる私たちの国との協力を推し進めることを願ってやみません。

皆様のご健康とご幸運、重要なお仕事でのご成功をお祈り申し上げます。

長崎原爆資料館にて

Zulfiya Kaliyeva （ズルフィーヤ　カリーエヴァ）

セメイ医科大学医療センター　上級看護師

2017 年初めてナシム研修に参加する放射線医学、放射線看護学の看護師として長崎を訪れました。まず、はじめに蒔本会長をはじめとするナシムの皆様に招聘頂きましたことを感謝申し上げます。

放射線の影響と関連疾患、同様に疾患への対処、診断法に関していかに深く研究されているかに感銘を受けました。教授らの講義は興味深く、分かりやすく長年の研究結果が叙述されておりました。特に、山下俊一教授、高村昇教授をはじめとする先生方に御礼申し上げます。自身と自身の人生を捧げたプロフェッショナルな皆さんの経験にこれからも多くを学ぶことができるでしょう。

研修で私は知識を向上させることができました。それをぜひ母国カザフスタンで同僚にシェアしていきたいと思います。そして私の指導教員である浦田教授、折田真紀子助教による私の専門研修プログラムは長崎における看護活動を深く知ることを可能としました。

折田助教は放射線防護における市民とのリスクコミュニケーションという重要な業務を推進していらっしゃいます。そしてそこには看護師の役割は何ものにも代えがたいものであります。

諫早市の長崎県看護協会は看護師の育成に大きな尽力をしています。職能の発達への意欲を持った看護師を常に育成し続けるということにおいては、貞方美恵子看護部長率いる長崎大学病院における看護師ペアリングシステム、勤務管理とプロフェッショナルな専門集団の組織が大変すばらしいと思いました。

救急救命センターでの心筋梗塞患者の救命活動では一糸乱れぬ整然としたチームワークを間近に感じ取ることができました。私をアテンドしてくださった看護師長、副看護師長、アシスタントの皆さんは私の尽きない関心事にすべて丁寧に答えをくださいました。

感染症センターでは綿密な準備態勢があります。看護師の皆さんが防護服の着脱をトレーニングするのを見学し、講義では危険感染症への安全対策を知り得ました。

研修期間を通じ私たちは、以前はおとぎ話に思えていた日本の文化に触れることができました。素晴らしい物語を教えてくれたのは、常に私たちの側にいてくださり配慮をし続けてくださった、長崎県被爆者援護課の西さんでした。そして親しい友人となった通訳竪山さんのプロフェッショナルな通訳に感謝します。お陰で経験を得、日本国民の歴史と文化に触れました。感謝し幸福を祈ります。

最後に日本の皆様の健康、ご多幸、長寿、ご繁栄、そして二度と悲劇が繰り返されないように深くお祈り申し上げます。

恵の丘長崎原爆ホームにて

韓国専門家派遣事業（セミナー）に参加して

長崎大学　原爆後障害医療研究所　所長　宮崎泰司

９月３日から４日にかけて、韓国の釜山大同（テドン）病院で行われたNASHIM専門家派遣事業のセミナーに講師として参加しました。専門家派遣事業は在外被爆者の医療に当たる医師等を対象として韓国においてセミナーを開催するもので、年に２回を目途に開催されています。昨年９月に参加しましたので１年ぶりの参加です。講師は私の他、原研分子の永山雄二先生にも参加していただきました。前回まで通訳をしていただいた長崎県職員の朴智賢（パク・ジヒョン）さんが退職されたため、今回はその後任として朴明玉（パク・ミョンオク）さんが加わりましたが、朴さんは通訳として初めて参加されるということでした。

私は１年ぶりの参加ですが、昨年はちょうど台風12号に追いかけられながら、韓国を目指しました。その前は１月末の大雪で飛行機に乗れず開催できなかったこともあります。

それを考えると、今回の旅はとてもスムーズでした。しかし、釜山に到着してから、当日の正午に北朝鮮が６度目の核実験を実施したという話を聞きました。それでも釜山市内はいたって静かで、日ごろとあまり変わったところはないように思われました。

釜山空港から市内へは大型タクシーを利用しました。空港から宿舎のある西面（ソミョン）までは40分程度でしたが、タクシー代は35,000ウォンで3,500円ほどです。

西面は駅の近くにロッテホテルやロッテ百貨店、ロッテ免税店をはじめとしてたくさんの商業施設がある一方で、一歩路地を入ると昔ながらの西面市場などもあり、若者も多くいろんな魅力にあふれた街です。 また、ロッテ百貨店の周辺一帯には「西面メディカル・ストリート」（SMS）があります。ここは韓国でも最大級の医療機関密集地の一つで、観光と連携した医療・美容・ショッピングができる街でもあります。宿舎でもらったパンフレットにも、「ロッテホテル・西面店の周辺一帯に230の整形外科、形成外科、美容整形外科、皮膚科、眼科などの医療機関とエステが密集しており、優れた医療技術の体験と釜山の若者文化を同時に楽しめる」と謳っていました。

１日目の夕食は、NC百貨店近くの食堂街で定番の焼肉をいただきました。韓国では焼肉も牛の専門店、豚の専門店、鶏の専門店と分かれており、牛も豚も食べたい場合はお店のはしごをすることもあるそうです。朴さんのおかげもあり、韓国ならではのお店でおいしい夕食をとることが出来ました。

二日目はソウルより大韓赤十字社の金昭廷（キム・ソジョン）さんが手伝いに来られ、大同病院で合流しました。

先ず、院長の朴慶桓（パク・ギョンファン）先生にお会いし、セミナー開催のお礼を申し上げました。大同病院は1945年の設立で72年の長い歴史がありますが、昨年から韓国赤十字社の協定病院となり、韓国で被爆者の診療に関わることになり、今回のセミナー開催を引き受けていただいたとのことです。

病院の中を見学させて頂きましたが、病床数は400ほどあります。血液透析や小児の医療、特に種々の小児リハビリテーションが充実しており、韓国中から子供の患者さんが来られるとのことでした。

国際ヘルスケアセンターが設置され、中国やモンゴルからの患者も受け入れており、１フロアーで全身の検診ができるように工夫されていました。被爆者もこのセンターを利用して診察を受けているとお聞きしました。各国の患者を受け入れるということから説明していただいたセンター長の崔（チョイ）先生は日本語も堪能でした。

セミナーはランチョン形式で行いました。12 時 30 分からの開催でしたが、お昼時間にもかかわらず、医師、看護師、医療技術の先生方 38 人に参加していただきました。

まず私が「放射線誘発造血異常―長期間の影響―」について講演しました。その後、永山先生が「放射線誘発甲状腺がん―長崎 / 広島、チェルノブイリ、福島の比較」と題して講演しました。セミナー全体で 1 時間しかありませんでしたので、英語での講義となりましたが、前もってスライドには韓国語訳を付け、皆さんへは韓国語の資料を配付して内容を理解して頂けるように致しました。英語で講義を行った後の質疑応答には、朴さんが韓国語の質問を日本語に直し、また、日本語の回答を韓国語に直してくれました。

なお、講義の後の質問は次のようなものでした。

1．広島に落とされた原爆より長崎に落とされた原爆が大きかったと聞いていますが、被害は広島のほうが大きかったのは何故でしょうか。

→長崎は爆心地を含む地域の東西が山に囲まれており、それが一種の遮蔽の役割を果たしたが、広島は市の殆どが平野であり原爆の影響が広い地域に及んだ。このように地形的な要因から広島の被害が大きかったと考えられる。

2．福島で生産される食品は日本では消費されていますか

→福島で生産されている農産物は放射線測定など検査が行われ安全性を確認したものを販売している、水産物については調査･研究の段階で現時点では国内で販売はされていない。

3．最近、北朝鮮の原子爆弾について韓国の国民は大変心配している。もし原爆が韓国に落ちた場合はどのくらい被害を受けるのでしょうか

→私は核兵器の専門家ではないが、北朝鮮が使用する爆弾は水素爆弾だと聞いている。
長崎に落とされた爆弾と種類が違うので確実な想像がつかないが、核爆弾は種類によっては長崎原爆の数百倍以上の破壊力にもなり得ると聞いている。

以上、3 つの質疑応答がありました。前日、北 朝鮮による 6 回目の地下核実験が実施されたばかりで、韓国の皆さんにとても関心があるのが分かりました。

韓国の被爆者の治療に当たる先生方にヒバクシャ医療についてさらに正しい知識と関心を持ち続けていただき、日韓が互いに協力して被爆者支援を進めていくことが重要であると思います。
そして放射線の健康影響と正しい利用についての知識をさらに広めていくことが必要であると感じました。

釜山大同病院の参加者の皆さんと

長崎市で出前講座を開催しました

ナシムでは小中学生を対象に、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及し、ヒバクシャ医療にもっと関心を持っていただくため、長崎大学の原爆後障害医療研究所の先生方に小中学校を訪れて講義を行っていただく「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座です。

今年の第１回は６月 19 日に長崎市立野母崎中学校で開催しました。野母崎中学校は生徒数が全校で 78 名ですが、この全校生を対象として、長崎大学の三根眞理子先生が「長崎原爆被爆者のこころの調査」と題して講義を行いました。

野母崎中学校で出前講座を行う三根先生

第２回は６月 30 日に長崎市立深堀中学校の１年生 43 名を対象に開催しました。 第１回と同じく長崎大学の三根眞理子先生が「原爆直後の救護活動と調査」と題する講義を行いました。

参加いただいた生徒の皆さんと開催に協力いただいた先生方にお礼申し上げます。

小中学校で出前講座を開催します。

小学校高学年から中学校まで、関心の程度に合わせて内容や講義時間は調整可能です。時間は 30 分から１時間まで。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

講座メニュー	
放射線って何？－身近な放射線の話	
放射線・紫外線と私たちの健康	
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
	長崎原爆被爆者のこころの調査
放射線といのち	

深堀中学校にて

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第42号
発行／平成29年10月

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/